第一次世界大戦と日本

平成15年4月22日・袖ケ浦公民館

きょうは、大正三年から四年間、ヨーロッパを戦乱の渦に巻き込んだ第一次世界大戦で、日本はイギリスとの同盟、日英同盟を大義名分にしてドイツとの戦争に入りましたが、これがその後の日本にどんな影響を与えたのか。時の首相大隈重信を中心に話してみたいと思います。

大隈は肥前佐賀藩の出身ですが、長州閥の総帥で、陸軍の大御所と云われた山県有朋と全く同じ天保九年に生まれ、大正十一年の新年早々、共に八十三歳で亡くなっています。早稲田大学を創立し、政党政治を訴え続けてきた大隈の葬儀は「民衆政治家」の評判にふさわしく、大勢の会葬者で賑わいました。当時の読売新聞を見ますと、見出しが「法被、前垂れ、丸髷と参拝者数十万人」。ちょっとオーバーな感じもしますが、そこらの小父さん、小母さんから、職人さんもいれば、店員さんもいる。いろんな階層の人が大勢集まったということでしょう。それに引き替え、一か月後に同じ日比谷公園で行なわれた山県の国葬は、欠席者が多く淋しかったそうです。新聞はうまいことを書くものですが、「大隈侯は国民葬、国民みんなで悲しんだが、きのうは民抜きの国葬でガランドウ」。長年権力を握り続けた藩閥政治家山県の死を、大隈と比べてこう書きました。確かに大隈という人は総理大臣を二度もやっていながら、長州・薩摩の藩閥政治の外にいたせいか、いつも「民衆の味方」といった国民的な人気がついて回った人でした。

私が早稲田に入ったのは昭和二十四年ですが、教授の中には大隈の演説をじかに聞いた人も多く、授業の合間にによくその話が出ました。「山県の耳、大隈の口」。こう云われたくらい、山県は人の話をよく聞き、情報を集めることにも敏感な人でした。対する大隈は、喋り出したら止まらない。「あるんであーる」、演説で得意な時には、語尾をこう伸ばすのがクセで、ひどい時には「あるんで、あるんであーる」と、二度も繰り返したと云います。いわゆる門戸開放で千客万来、誰とも分け隔てなく話し談論風発。「世界の道は早稲田に通ず」と豪語していたそうですが、ちょっと憂欝な気分で訪ねた人でも三十分も経って帰る時には、何か晴れ晴れした、いい気分になったと云います。この辺が山県の陰湿な感じと違って、親しみやすい民衆政治家としての人気を高めたようです。

しかし大隈が再び首相になったのは、明治三十一年以来十六年ぶり、七十六歳の高齢でした。「駿馬も老いては駑馬」と云います。その人気の高さと実際の政治手腕、リーダーシップとの間には大きな開きがあったのではないでしょうか。私

はその後の日本の歴史を考える時、この第二次大隈内閣の時が日本の分水嶺だったように思うのです。と云いますのは、日本は拙速なまでにドイツとの戦争を急ぎ、中国山東半島のドイツの租借地青島を占領しました。それが中国に対する日本の野心の表れだとしてイギリスやアメリカの疑惑を招き、日本外交の柱だった日英同盟の廃止にもつながっていきます。中国にいわゆる「二十一か条要求」を突き付けたのも、この大隈内閣です。「二十一か条要求」については後で詳しくお話しますが、それまで中国侵略者はイギリスでありロシアであり、ドイツ、フランスだったのに、代わって日本だけが非難の矢面に立たされることになりました。まさに中国民衆の反日・抗日運動に火をつけることになったのです。日本が国際的な孤児となり、満州事変から支那事変、太平洋戦争へとつながる戦争のレールは、この大隈内閣の時に敷かれたと云っても過言ではないでしょう。

それでは大正三年四月に成立した第二次大隈内閣は、いったいどんな背景から生まれたのでしょうか。それまでの薩摩出身、海軍大将の山本権兵衛内閣は、歴代内閣最大の課題である行財政整理を断行し、陸軍や長州閥の反発をよそに着々と成果を挙げていました。ところがシーメンス事件という、山本のお膝元・海軍での軍艦建造をめぐる汚職事件が暴露され、総辞職に追い込まれたのです。貴族院で海軍の予算が削られ、大正三年度予算が不成立となったためでした。元老会議の後継首相選考は難航しました。その頃の日本の政治を動かしていたのは、日露戦争で日本が勝利し富国強兵の時代ですから、陸軍と海軍、陸軍には長州、海軍には薩摩という強大な派閥が結びついているわけですが、それに衆議院第一党の政友会、そして官僚勢力の代表である貴族院です。この四大勢力が大正に入ってからう相次ぐ政変で手傷を負い、いわば四すくみの状態になって、うっかり前に出ていけなくなっていたのです。

まず大正元年十二月に倒れた政友会の西園寺公望内閣ですが、その原因は陸軍が二個師団、約五万人の兵力増強を強硬に要求したことでした。ロシアの復讐戦に備えるためどうしても必要だと云うのですが、日本は日露戦争で外国から莫大な借金をしています。「財政上とても無理だ」とはねつけると、陸軍大臣が辞職してしまったのです。陸軍の要求を入れない内閣には、後任の大臣を送らない。陸軍大臣がいなくては内閣を作れません。陸海軍大臣現役武官制、つまり「陸海軍大臣は現役の大将、中将に限る」と云う規定を盾にとって、陸軍が内閣を倒した最初の例になりました。代わった長州と陸軍の桂太郎内閣も、「憲政擁護・閥族打破」、憲法に基づいた政治を守れ、薩長の藩閥政治を打ち破れと云う、国民の大合唱の前に五十日余りで崩壊しました。こちらは政党、民衆の力が内閣を倒したわけですが、これが「大正政変」と云われるものです。そして今度は、政友会と組んだ薩摩と海軍の山本内閣が、貴族院によって倒されたのです。

一度は、山県直系の貴族院議員清浦奎吾の内閣が出来かかりました。しかし海

軍は、山本内閣を倒した貴族院中心の新内閣構想に反発しました。シーメンズ事件で世論の袋叩きにあった海軍ですが、その年の軍艦建造費だけでも認めて貰わないと、大勢の熟練工をクビにしなければなりません。一旦やめさせてしまえば今後の軍艦建造に支障を来すと、海軍は臨時議会を開いて承認してもらうよう清浦に要求したのです。貴族院をバックにしている清浦には、衆議院で圧倒的多数の政友会を敵にして、その予算を通す自信がありません。世論もまた、時事新報が「政党に基礎を置かない内閣は、大正三年の街頭にちょん髷、刀を持った者が躍り出たようなものだ」。こんな論評を書いているように冷ややかでした。清浦が新聞記者に話した「まあ鰻屋の前を通っているようなものだ。匂いだけはするが、なかなかお膳立てが出来ない」。これが新聞記事になって、鰻の匂いだけ嗅いで食べ損ねた内閣、「鰻香内閣」という有り難くない名前を日本の政治史に残して流産しました。

大隈内閣は、いわばこうした政治の真空状態の中で生まれたのです。万策尽きた元老会議で、長年の政敵である大隈の名前を持ち出したのが、長州出身の元老井上馨です。井上にとって政友会は、盟友伊藤博文と一緒に創立し、資金援助もしてきた子飼いの政党です。本人も「政友会の大旦那」の積もりでいました。ところがその政友会が、事もあろうに大正政変で長州征伐の先頭に立ち、しかも薩摩の山本と手を組みました。井上は可愛さ余って、憎さ百倍の心境だったのでしょう。「薩長から首相を出せば、国民や政党の反発を招く。この際まるで薩長に関係がなく、国民に人気のある大隈を出すのが一番よい。過去のわだかまりを捨てて、一致協力しようじゃないか」と、元老たちに訴えたのです。

しかし山県は、ためらいました。何故なら大隈は、山本内閣が総辞職するといち早く「今こそ国民内閣を作るべきだ」と云う声明を出し、「元老何するものぞ。彼らはもはや脱け殻だ。元老に頼らなければ内閣を作れないようでは、日本の恥ではないか」と気炎を挙げたばかりだったのです。そんな「脱け殻」扱いされた山県が、結局は大隈内閣に同意したのも、「民衆の大火事は、早稲田のポンプでなければ消せない」。こういった大隈を推す声が、長州閥や陸軍の間からも出てきたためです。大隈内閣には、政友会征伐だけではなく、大隈の人気を利用して藩閥反対の国民感情、憲政擁護の国民運動を静めたい。そういった魂胆もあったのです。

政治談義が何より好きで、門を叩けば誰でも迎え入れる大隈は、「早稲田の大風呂敷」と陰口されながらも、新聞記者には絶大な人気がありました。大正政変で護憲運動の先頭に立った全国新聞記者連合会も、「時局を収拾して立憲政治を確立する者、閣下を措いて他になし」と、大隈の出馬を強く促していました。元老の後押しに、世論の支持もあります。大変な自信家であり、生来の楽天家でもあった大隈が、政界復帰に色気を持ったのも無理はありません。こうして第二次

大隈内閣は大正三年四月十六日、桂太郎が作った立憲同志会と尾崎行雄らの中正会をバックに成立したのです。「大正の花咲かじいさん」ともてはやした新聞もありました。大隈なら立憲政治の花を咲かせるだろう、人心一新の内閣だと期待したのです。大隈も意気軒高でした。組閣を終えると、さっそく新聞記者を前に「勇将の下に弱卒なしだ。諸君、我輩を信ぜよ」と大見得を切り、大隈内閣は国民の拍手喝采の中でスタートしたのです。

しかし、これほど無定見な内閣もそうはなかったのではないでしょうか。まず第一に、大隈があれほど嫌い、非難攻撃してきた元老たちと妥協し、その後押しで初めて出来た内閣だったことです。第二に、内閣の看板は大隈でも、実質的には外務大臣として入閣した立憲同志会総裁加藤高明の「加藤内閣」だったことです。大隈は組閣の決意を固めると、政友会に対抗するため真っ先に加藤の協力を求めました。その時加藤の出した条件が、誰を大臣にするか閣僚の人選一任と、全ての政策についての事前了解だったのです。元老も無視出来ないが、それ以上に加藤の意に反して同志会にそっぽを向かれては、内閣崩壊につながります。主要閣僚の顔触れを見ても、大蔵大臣若槻礼次郎、内務大臣大浦兼武と、加藤が外相を務めた第三次桂内閣の時とそっくり同じなのです。加藤は、自分と気心の知れた者で内閣を固め、強気で強引な外交で大隈内閣を引っ張っていくことになります。日本で最初に政党を組織し、その基盤の上に立って薩長の藩閥政治に対抗してきた大隈でしたが、皮肉にもその政党が大隈の行動を規制することになったのです。

在野時代の大隈は、営業税、通行税などを悪税だとして、その全廃が持論でした。野党時代の立憲同志会もまた、「減税要求」を武器に政友会を攻撃してきました。しかし日露戦争が終わってからというもの、日本にとって一番の悩みは借金だけあって、お金がないことなのです。日露戦争の戦費を公債でまかなったため、戦争が終わった時の借金は二十億円。そのうち外国で募集した外債が十二億円、利子の支払いだけでも毎年六千万円です。そこへ陸軍の二個師団増設要求と海軍の軍艦建造費。年間五、六億円の国家の予算から、三分の一が借金返済や利子の支払い、三分の一が軍事費で消えてしまうのですから、とても減税どころの話ではありません。

大体が財政再建に軍備拡張、減税と、この三つを同時に出来るくらいなら、西園寺内閣は倒れなかったし、大正政変も起こらなかったでしょう。ところが大隈は首相就任前から、陸軍の二個師団増設に色よい返事をしていました。海軍の軍艦建造も、目の前で清浦内閣が流産したのを見れば、無下にははねつけられません。立憲同志会にしても、政権についたからといって、一夜で減税方針を撤回するわけにもいきません。最初からこうした難問を抱えていた大蔵大臣の若槻は、加藤と相談して、とにかく大隈の口を封じようということになりました。お喋り

の大隈の口から、うっかり減税などを公約されたら、どうにもなりません。若槻の財政説明を苦い顔をして聞いていた大隈は、それから二、三日しての演説会でいきなりぶち上げたと云うのです。「営業税を廃止するなどと、そんな馬鹿なことがあるもんか。そんなことを唱えるヤツは大馬鹿者だ」。まさに手の平を返したような、無定見の見本みたいな話ですが、それが通ってしまうところが大隈でした。こんな話があります。大隈は典型的なザル碁で、定石というものを全く知らなかったそうです。ところが勘定の早いことは天下一品で、小を捨てて大を取る。政治上の問題でも素早く利害得失を見分け、機先を制する手腕は囲碁そっくりだったと云います。若槻は「大隈なればこそ、他人には出来ない芸当だ」と感心していますが、当座はそれでごまかしても、財政が一日もゆるがせに出来ない問題であることは、大隈にも若槻にもよく分かっていました。

そこで大隈内閣が打ち出したのが、国防会議の設置です。日本の財政膨張は軍事費が大き過ぎるからだ。軍事費に手をつけなければ、本当の財政整理は出来ない。不要不急なものを調べて、国防と財政を調整しようというわけです。首相の下に蔵相、外相、陸海軍大臣、それに参謀総長と軍令部長をメンバーとする会議の設置を提案したのですが、さっそくイチャモンをつけたのが陸軍でした。「国防というのは統帥権、軍隊を動かすことで、それは軍人がやることだ。文官などが入って、口出しすることじゃない」と云うのです。結局は名称を「防務会議」、何を防ぐのかあいまいなものにして、とにかく六月二十三日に設置に漕ぎ着けました。この会議がうまく機能していたら、あるいは日本のシビリアン・コントロールの走りになっていたかも知れません。しかし陸軍は頑迷でした。若槻蔵相が最初の会議で財政の実情を説明すると、参謀総長の長谷川好道大将は顔色を変え「これはいかん。おい、行こう」と云って、陸軍大臣を促し退席してしまったと云うのです。かんじんの軍事費節減の話に入る前です。余計な注文をつけられたら困ると思ったのでしょう。その後会議が開かれたかどうか、若槻が記憶にないと云うくらい、最初から暗礁に乗り上げ、全く有名無実の会議に終わってしまいました。

そのままだったら、大隈内閣は恐らく半年も保たなかったでしょう。何しろ軍備拡張もやる、減税もやると、約束手形を乱発しているのです。行き詰まりは目に見えていました。ところが、これを救ってくれたのが、防務会議設置から五日後の六月二十八日、バルカン半島サラエボでの一発の銃声だったのです。オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻がセルビアの青年によって暗殺されたのです。これをきっかけにイギリス、フランス、ロシアなどの連合軍四千二百万、ドイツ、オーストリアなどの同盟軍二千三百万の正面衝突となり、三千七百万人の死傷者を出す第一次世界大戦へと発展しました。

この大戦を「大正新時代の天祐」と云ったのは、元老の井上馨です。ヨーロッ

パの戦場からはるかに遠い日本は、思いもかけなかった空前の軍需景気に沸きました。あれほどあった借金、国際収支と財政という「双子の赤字」を、それこそ魔法使いの手品みたいに解決してしまったばかりでなく、借金国が一躍お金を貸す側、債権国になってしまったのです。

実はこの世界大戦には、日露戦争が少なからず影響しているのです。ロシアという国はあんな大国でありながら、北のバルト海にしか海の出口がありません。「南へ出たい、海へ出たい」というのは、云ってみればロシア建国以来の悲願でした。ペリーの黒船が日本にやってきた頃、ロシアは黒海から地中海に出ようとして、イギリス、フランスと戦って敗れました。ナイチンゲールが活躍したクリミア戦争です。これで西の出口を止められたロシアは、勢い東へ東へと、太平洋に出口を求めるようになります。そして海軍基地ウラジオストックやシベリア鉄道を建設し、旅順を手に入れたところで、日本と戦って敗れました。ロシアの極東南下政策は大きくつまづき、再びバルカン半島に方向転換せざるを得なくなったのです。その結果として、今度はバルカンに出ようとしていたオーストリア、その同盟国であるドイツとの対立を深めることになりました。

ドイツは日清戦争の後、ロシアと一緒になって日本に三国干渉をしています。下関講和条約で日本の物になった旅順を清国に返させたのですが、この三国干渉にしても、ロシアに盛んに日本との戦争をけしかけたのも、ロシアの関心を極東に向けたいからでした。ロシアを日本と対立させ、その強大な陸軍力を極東に釘づけにしておく。鬼のいない間に、オーストリアのバルカン進出を助ける狙いがあったのです。当時のオーストリアは大国です。明治維新のころハンガリーを傘下に入れ、世界大戦が始まる六年前には、サラエボのあるボスニア州をセルビアから奪いました。ところがボスニア住民百六十万の多くはスラブ系です。セルビア語を話し、宗教もギリシア正教です。新しい支配者のオーストリアはドイツ語を話し、カトリック教徒でしたから、その支配に強く反発したのです。

サラエボでは昭和五十九年に冬のオリンピックが開かれていますが、そんなことも忘れてしまうくらい、その後も激しい民族紛争が続いていることは皆さんご存じの通りです。その背景にはバルカン半島が長い間トルコに支配され、多数の民族と宗教、カトリック、ギリシア正教、イスラム教が、それこそモザイク模様のように複雑に入り組み、憎しみと抗争を繰り返してきた歴史があります。まさに「ヨーロッパの火薬庫」でした。バルカン半島では大正元年から翌年にかけて、二度のバルカン戦争が行なわれていますが、弱小国家のバルカン諸国に軍事援助をし、対立を煽ったのがロシアであり、オーストリアだったのです。ロシアは新しい南下政策として、セルビア、ギリシア、ルーマニア、モンテネグロにバルカン同盟を作らせました。黒海の入り口、ダーダネルス海峡を塞いでいるトルコとブルガリアを孤立させ、念願の地中海へ出る狙いでしたが、敏感に反応したのが

オーストリアです。ドイツ、トルコ、ブルガリアとの四国同盟を打ち出し、ロシアの進出を食い止めようとしているところへ、このサラエボでの皇太子夫妻暗殺事件が勃発したのです。日露戦争がなければ、ロシアの関心は依然として極東だったでしょうし、バルカン半島の「火薬庫」に火が点けられることもなかったでしょう。

オーストリアは七月二十八日、セルビアに宣戦布告しました。セルビアの後ろ盾であるロシアが軍事動員を始めると、ドイツはまず八月一日にロシア、三日にフランスに宣戦布告。四日には、今度はロシア、フランスと同盟しているイギリスが、ドイツに宣戦布告しました。バルカン半島の火薬庫に点いた火をヨーロッパ全域にまで燃え広がせたのは、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世の野心であり、それに対するフランス、イギリスの警戒心でした。そしてドイツとの戦争に向けて日本を馬車馬のように走らせたのが、外務大臣の加藤高明だったのです。

日本ではそれまで、重要な国策の決定には必ず元老が加わっていました。元老は憲法や法律に基づいて置かれたものではありませんが、それでいてそんなに大きな権勢を誇ったのは、明治天皇の詔勅で「国の始めに勲があった」、明治維新に功績があったと云うことで「元勲」とされたからです。戦前の天皇絶対の時代に、これほどのお墨付きはありません。しかも後継首相の選考は、この元老会議によって行なわれることが慣例となっていましたから、「内閣の製造者」、「キャビネット・メーカー」として大きな力を揮ったのです。ところが、この日本の対独参戦に特徴的なことは、その元老たちが全く知らず、本来は戦争の主役である陸海軍も、加藤外相に引っ張られる形で参戦に同意したことです。

加藤高明は愛知県の出身ですが、東京帝国大学を出て三菱に入り、三菱財閥を作った岩崎弥太郎に認められ、その娘婿になった人です。明治三十三年、四十歳の若さで伊藤博文内閣外相となり、この大隈内閣では四度目の外相でした。頭も切れたし、自らの外交にも自信満々でした。加藤は元老の干渉を退け、自分の責任で外交に当たろうとしたのです。歴代の外相は、外交文書をまず元老の元に届け、重要な外交交渉には必ずその意見を求めてきましたが、加藤は一切しませんでした。それどころか、報告さえしようとしなかったのです。

加藤は日露戦争直後の第一次西園寺内閣で、鉄道の国有化に反対して外務大臣を辞職しています。当時の国有鉄道は東海道線と北陸線くらいのもので、山陽鉄道が三井、九州鉄道が三菱といった具合に、大半が民間の経営でした。西園寺内閣は、これを戦後財政と軍事輸送の観点から国有化に踏み切ったのですが、世間では「加藤は三菱に義理立てして外相を辞めたのだ」と取り沙汰したものです。加藤自身も辞職の理由として、普通なら病気を理由とするのに、わざわざ「鉄道国有化で意見を異にする」と書いています。しかし実際は、日露戦争が終わった後も満州で軍政を続け、外務省にも一切口出しさせない陸軍に対して、「これでは

責任ある外交が出来ない」と、抗議しての辞職だったのです。陸軍との対立が表面化するのを避けて、鉄道国有化を口実にしたわけです。

ですから「外交は閣議決定に基づいて外交機関が当たる」。陸軍はもちろん、元老にも二重外交はさせないと云うのが加藤の信念でした。加藤については傲岸だ、貴族的、官僚的だ、包容力がないといった批判があります。しかし大正十五年一月、加藤が首相在任中に議会で倒れて亡くなった時、新聞が「剛直な意思、それが加藤の性格だ」。こう書いたように、一度云い出したら節を曲げない、外交官としての信念を持っている人でした。加藤は「最初からイギリスの勝利を信じていた」と云っていますが、ただ信ずる余り一切妥協しない剛直さ、それが元老との間に再三摩擦を生み、拙速な外交にもつながったように思います。

イギリスは最初、日本の参戦までは望んでいませんでした。戦争が極東に波及し、そのどさくさに日本が中国に進出するのを警戒したのです。しかし山東半島の青島にはドイツ太平洋艦隊の基地があり、巡洋艦三隻と四千三百の兵力が配置されています。イギリス支配の香港や威海衛が攻撃される恐れもありましたし、現にインド洋では仮装巡洋艦エムデンの神出鬼没の活躍が、イギリス商船の脅威の的になっていました。そこでイギリス政府は八月七日、「ドイツの軍艦を追っ払ってほしい」と、日本海軍の限定的な参戦を希望してきたのです。早くから参戦の意思を固めていた加藤にとっては、まさに渡りに舟でした。その夜大隈の私邸で開かれた緊急臨時閣議で、加藤は日英同盟を大義名分に参戦の必要を強調したのです。

日英同盟は明治三十五年に結ばれましたが、最初は日本がロシアと戦争になっても、イギリスは中立を守る。しかし日本が二国以上と戦争になれば、イギリスも参戦の義務を負う。つまり、ドイツ、フランスがロシア側につくことを牽制した防守同盟でした。これがどちらか一方が戦争になれば、直ちに参戦の義務を負う攻守同盟に強化されたのは、日露戦争中の三十八年のことです。日本の力を見直したイギリスからの希望でしたが、それでも対象地域は極東、せいぜいインドまでと限定されていました。ですから香港や威海衛が攻撃されない限り、ヨーロッパの戦争に日本が参戦する義務はないのです。

加藤は一応そのことを説明した上で、「同盟の誼みからいっても、一方が困っている時に助けるのは当然ではないか」と、まず同盟の情誼を訴えました。第二に挙げたのが、日本がこの機会に極東からドイツの勢力を一掃し、国際上の地位を一段と高める利益です。そして、「日清戦争の時、日本はドイツの三国干渉でひどい目にあった。青島に手をつけるのは報復のいい機会だと思う」と付け加えたのです。加藤のこの言葉は、やがて世論の対独参戦論の中心となったものですが、いずれにしろ日本にとっては戦場の遠いヨーロッパの戦争です。直接火の粉をかぶる心配のない、気楽な戦争でした。一部慎重論は出たものの深夜の閣議は

八日午前二時、対独参戦を決定したのです。

早耳の山県も、これを知ったのは夜が明けてからでした。夕方から元老を交えて開かれた閣議では、元老たちから口々に強い不満が出ました。山県は「元老の勧告を干渉と云い、元老に外交文書を回すことが機密漏洩につながると云うのなら、今後政府と協議する必要もない」。こう云って、加藤の秘密外交をなじりました。その場は大隈が詫びを入れて納まりましたが、大正新時代と共に元老の力も弱くなっていました。日本が日清、日露戦争という明治国家最大の危機をどうにか乗り切ることが出来たのは、世界の中の日本、弱い日本の立場を忘れなかった元老たちの知恵でしたが、残念なことでした。

それにしても、山県のこの時の発言には、耳を傾けるべき点が多いのです。山県がまず求めたのは、ドイツに対する信義であり、慎重な配慮でした。「たとえドイツが負けても、ドイツという国が消滅するわけでも、ドイツ人が全滅するわけでもない。このまま参戦すれば、日本は永久にドイツの恨みを買うことになるだろう。日英同盟を基軸に考えるにしても、イギリスに不信感を与えるような真似は出来ない。ドイツに対して参戦するにしても、日英同盟のの義務から止むを得ず行なったのだということを、ドイツはもちろん列国にも納得させるようにしなければならない」。その手順も踏まずに参戦するのは、以ての外だと云うのです。そして「日英同盟に基づいて参戦するにしても、イギリスと協同して行い、あくまでイギリスが主で、日本は従となるべきだ。青島を攻撃して中国領土の侵犯問題でも起これば、非難されるのは日本だけだ」と注文をつけています。やがて山県のこの心配通りになり、日本は非難の矢面に立たされるのですが、一度閣議決定したものを引っ繰り返す力は、元老といえどもありませんでした。

日本のせっかちな参戦決定に、驚いたのはイギリスです。グレー外相は九日、「日本の参戦は、支那大陸にも戦線拡大の印象を与える。支那の国内不安を誘発するから、海上貿易保護の範囲に活動を限定してほしい」。こう云って、日本の本格的な軍事行動は、しばらく見合わせてほしいと「待った」をかけてきたのです。確かにイギリスの要請も虫がいいのですが、加藤は「ドイツの軍艦を追い払うには、大砲を撃たなければならないではないか。それで戦争をするなと云うのは無理だ」。こう云って、はねつけました。こうして日本は八月十五日夜、二十三日正午までに無条件で承諾するよう、ドイツに最後通牒を突き付けたのです。内容は、第一に支那方面からのドイツ軍艦の即時退去、第二に青島租借地を支那に返す目的で、無条件で日本に引き渡すことの二点です。最後通牒にせめて三週間の猶予期間を求めていた山県はこれを聞いて、「もうダメだ。日本の外交は叩き壊された。加藤は眼中にあるのは自分だけで、国家という観念がない。実に残念な方法で最後通牒を出した」と嘆いたそうです。

ドイツは、日本が何を小癪なと思ったのでしょう。ドイツの回答がないまま、

日本は八月二十三日ドイツに宣戦布告しました。しかし山県の云う通り、まず手順を踏んで、イギリスが納得するまで待っても、決して遅くはなかったのです。あれほど日本の参戦を渋っていたイギリスが、ドイツ海軍の通商破壊に悲鳴をあげ、それこそ懇願するような形で日本海軍に助けを求めてくるのです。ドイツの持つ百十一隻の潜水艦Uボート、この「海の一匹狼」の被害は深刻でした。大正五年の後半だけで地中海で二百五十六隻の商船が沈められ、イギリスは翌年の六年一月、地中海への日本艦隊派遣を正式に要請してきたのです。日本政府がこれに応じたのは、ドイツが国際法を無視して「無制限潜水艦作戦」の実施を宣言したからでした。アメリカもこれをきっかけに対独宣戦するのですが、日本としてはもう一つ、サイパン島など日本が占領したドイツの南洋諸島について、戦後イギリスが有利に計らうとの内諾を得たからでした。

日本海軍は地中海のマルタ島に巡洋艦一隻と駆逐艦八隻、南アフリカのケープタウンにも艦隊を派遣しましたが、中でも連合国各国の感謝と称賛の的になったのが、地中海での駆逐艦の献身的な活躍でした。イタリア沖で大型客船が撃沈された時は三千人の救助に活躍し、イギリス国王から勲章を授けられています。駆逐艦「榊」はドイツ潜水艦の魚雷攻撃で、艦長以下五十九人の戦死者を出しましたが、その慰霊碑はマルタ島基地の一角に建てられました。

こうした感謝と称賛がありながら、残念ながら日本の対独参戦は中国に対する野心の表れだとして、アメリカの疑惑を招きました。イギリスは兄弟国アメリカとの協調を最優先にしてきましたから、日米間がぎくしゃくすることは困ることだったのです。実は日英同盟は明治四十四年七月に、二度目の改訂が行なわれています。それは攻守同盟の対象からアメリカを外すことでした。満州や移民問題で日米の対立が深まり、万一日米戦争になれば、イギリスはアメリカと戦わなければなりません。それを心配したイギリスからの要請でした。加藤外相もイギリス大使時代に、グレー外相から念を押されています。「イギリス政府は全員が日英同盟の継続を希望している。ただそれには、アメリカとの親善がイギリスの国是だから、是非ともアメリカとの関係に配慮してほしい」。グレーのこの言葉は桂内閣外相になった加藤から、次の山本内閣外相の牧野伸顕にも外交の重要方針として引き継がれました。軍の指導部もまた、日露戦争が日英同盟のお陰で勝てたことはよく知っていましたから、明治四十年に制定した国防方針でも、「日英同盟は確実にこれを保持すること」と、その必要性を強調していたのです。

しかし大正十年十二月、満期を迎えた日英同盟は、日本側の継続の希望をよそに廃止されました。イギリスは同盟をどうするか、初めて連邦会議を開いて、自治領各国に諮ったのです。この大戦に大勢の兵士を送り出している自治領は発言力を強めており、イギリス政府もその声を無視出来なくなっていました。九分通り継続に決まりかけた同盟を土壇場で引っ繰り返したのは、カナダの強硬な反対

でした。同盟を目障りに感じていたアメリカが、やはり日本との移民摩擦で揺れるカナダを動かしたのです。オーストラリアのヒューズ首相は憤然として起立し「我々が数十万の兵士をヨーロッパの戦場に送ることが出来たのは、日本の海軍が守ってくれたからだ。それなのに、この信頼すべき盟邦に背くのは裏切りだ」と、同盟継続に熱弁を揮いました。しかしイギリスは、日本との同盟よりアメリカとの親善の道を選んだのです。代わってアメリカ、フランスを加えた四か国条約が結ばれましたが、ほとんど機能しませんでした。同盟は二つの国の間で結ばれてこそ、責任も義務も明確になるのです。日本は日英同盟という、二十年間も続いた外交の柱を失いました。加藤外相の強引な参戦外交が、その種を播いてしまったのです。もっとも加藤にとっても、この代償は高いものにつきました。加藤の元老軽視の姿勢は、山県はじめ元老たちの反感を買い、立憲同志会の総裁でありながら、大正十三年六月まで政権の座につけずにいたのです。

× ×

「明治維新は薩長土肥によって成った」と云われますが、大隈重信の肥前佐賀藩は、慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いには参加していません。いわば倒幕戦争の第一戦に遅れをとりながら、肥前が明治維新の創業に名前を列ねることが出来たのは、藩主鍋島閑叟の存在が大きかったのです。余り人を誉めることのない大隈も、「王道の人であった」と手放しで誉めています。佐賀藩は三十五万七千石の外様大名ですが、十六歳で藩主になった閑叟は、藩の財政を建て直すため、粗衣粗食令、粗末な着物を着て粗末な食事をせよと、自らその先頭に立ちました。諸大名への贈り物や答礼は五年間中止。領内から料理屋をはじめ芸者、旅役者、相撲取りと、遊びや贅沢に関するものを一切締め出し、三文以上の饅頭は作ってもいけないし、食べてもいけない。ちょっと厳格過ぎて窮屈な感じもしますが、それでいて閑叟は下には寛大な人で、一種の社会政策もやっているのです。馬で二、三十里も遠乗りしては、農民の話をじかに聞き、生活をその目で見て、地方役人の行政を正しました。大地主を集めて十年間小作料を免除させ、十年たつと「もう十年」と云って、自作農を保護したと云うのです。

閑叟は産業を奨励し、道路を作り、豊かになった藩の懐から、惜し気もなく西洋文明、軍事技術の導入に金を注ぎ込みました。と云いますのは、この藩は参勤交代がない代わりに、当時外国との唯一の窓口である長崎警備を幕府から命じられていたのです。大隈が十三歳の時に亡くなった父親も砲術家で、長崎砲台の司令官をしていました。佐賀藩は長崎を守るため、日本で初めて蒸気船を作り、アームストロング砲、ライフル銃と、日本では最も近代化された洋式軍隊を持つ藩だったのです。明治新政府が、倒幕戦争にこの軍隊を放っておくはずがありません。佐賀藩は薩長から懇願される形で、明治維新に加わったのです。

この藩はまた代々、異様なほど教育に力を入れた藩でした。小学から大学段階

まで設けて、進級試験に落ちると家禄を削ったと云うのです。語学でも武芸でもなにか免状を一つ取らないと、百石取りの侍が八十石も取り上げられたと云います。長崎警備が藩の仕事ですから、他の藩のように「異学の禁」、外国語を禁ずることもなく、英語、オランダ語の勉強は早くから盛んでした。大隈の英語の先生はフルベッキという、オランダ系アメリカ人の宣教師です。明治新政府に岩倉使節団の欧米派遣を提案した人ですが、フルベッキは「私は二人の有望な生徒を持った。それは大隈と副島種臣だ」。副島は外務大臣に当たる外務卿になりましたが、「彼らは新約聖書の大部分を研究し、アメリカ憲法の大体を学んだ」と云っています。佐賀藩はこうして大隈、副島、さらには佐賀の乱で処刑される江藤新平など、語学が出来て知識があり、実務もわかる有能な人材を、数多く新政府に送り出したのです。

大隈の若い頃の写真を見ても、人一倍大きな口を「へ」の字にして、負けん気の強さが分かります。本人が「勉強より喧嘩好きだった」と云うように、大隈の特技は弁舌、それも討論でした。寡黙、口数が少ないことを美徳とした侍社会では珍しい才能でしたし、明治新政府の外国局判事、外国との折衝役になった大隈がとんとん拍子で出世していくのも、この弁舌という特技のお陰だったのです。

明治元年、組織も固まらず、西も東も分からない新政府に、最初にふりかかった難問が、「浦上事件」と呼ばれるキリシタン事件でした。浦上は長崎原爆の爆心地ですが、戦国時代に大村純忠と云うキリシタン大名の支配地だったため、徳川時代になっても表向きは浄土宗ということにして、キリスト信仰がひっそりと守られていました。ところが慶応元年、フランス人神父が浦上に天守堂を建てると、時代が変わったのをハダで感じたのでしょう。隠れ信者が続々と現れ、「自分たちは信者です」と名乗り出たのです。長崎奉行も放っておけず、信者たちを捕まえましたが、列国が抗議している最中に幕府が倒れ、その解決は新政府に持ち越されました。

実はキリシタン禁制は、ちょっと意外に思われるかも知れませんが、明治新政府になっても徳川時代のまま続いていたのです。しかも新政府が、信者三千人を「邪宗門」として各藩に監禁したものですから、怒ったのは各国公使です。余談になりますが、島根県西部の城下町、森鴎外の出た津和野へ行かれた方は、津和野駅の西にある小高い乙女峠にマリア堂が建っているのをご記憶だと思います。津和野藩は神道研究が盛んな藩で、信者二十八人とその家族百二十五人を光琳寺と云うお寺に監禁したのです。改宗を迫っての拷問は凄まじく、氷を張った池に投げ入れる氷責め、わずか九十㌢四方の小箱に押し込める「三尺牢」。改宗を拒否したまま死亡した信者、家族は三十四人を数えと云いますが、昭和二十六年に光琳寺の跡地にマリア堂が建てられたのだそうです。

各国はイギリス公使パークスを先頭に、「邪宗門とは何事だ。自分たちは皆ク

リスチャンだ。信仰の自由を認めよ」とねじ込んできました。パークスは傲岸尊大、しかも恫喝的な態度で恐れられていました。大阪本願寺でのパークスとの対決に新政府が起用したのが、喋り出したら止まらない、三十歳の大隈だったのです。午前十時から始まった会談で、パークスはまず一発かませました。「自分は英国皇帝の代理だ。こんな名前も知らない書生とは話が出来ない」。大隈はすかさず「そっちが皇帝代表なら自分は天皇代表だ。談判出来ないと云うのなら、これまでの抗議は撤回したものとみなす」と一歩も譲りません。大隈は予めパークスの性格を調べていて、向こうが強く出ればこっちも強く出る。法律論でくるなら法律論で行くと決めていました。それから六時間、昼飯も食べないでやり合ったと云うのですから、大隈も相当なものです。大隈は「パークスには一点だけ、からりと晴れたところがあった」と云っています。一度納得すれば、ぐずぐず云わないということでしょう。「これは日本が決めた法律なのだ。どんなに異論があっても、法は守らなければならない。法律に基づいて自分の国の人間を処分するのに、外国の指図は受けない」。こういう大隈に、ついにパークスも折れました。キリシタン禁制が解かれたのは明治六年になってからですが、余り奨励はしたくはなかったのでしょう。街角の「禁制」の高札をはずして、それとなく知らせたのだそうです。

大隈に聞けば何でも知っていますし、仕事も出来ました。大隈は明治三年には早くも大臣格の参議になっていますが、日本に太陽暦や七曜制を採用したのも大隈なのです。西欧諸国が太陽暦を使っているのに、太陰暦のままでは近代化を進めるのに不便だとなったのですが、実際は大蔵卿をしていた大隈にとって、新政府の財政逼迫が大問題だったのです。太陰暦だと十九年に七回の割合で閏月を入れており、二、三年に一度は一年十三か月の閏年がやってきます。役人の給料は明治四年に年俸制から月給制になっていて、明治六年は閏年ですから月給も十三か分払わなければなりません。そこで大隈は、その年が来ないうちに改暦を実行してしまおうと、明治五年十一月に詔勅を出して、明治五年十二月三日を新暦の明治六年一月一日としたのです。

当時の新聞を見ますと、「師走の三日に正月がやってくる。やはり徳川の正月がいい」と嘆くお年寄りの声やら、新郎側は結婚を新暦で申し込んだ積もりだったのに、新婦側は旧暦と思い込んでいて大騒ぎなったとか。いろいろな悲喜劇を紹介していますが、十二月が二日で終わったため十二月の月給も払わずにすむと云う、おまけまでつきました。徳川時代の日本人は、ほとんど働きづめだったと云っていいでしょう。新政府はご一新になって、休みの恩恵を与えようと、「一六」と云って月に六回、一と六の日を休日にしたのですが、ちょっと多過ぎますし、外国と休日が違ったのでは銀行や役所の取引に不便です。大隈は改暦に併せて七曜制にし、日曜を休日にしたのです。

大隈が現実的な実行力のある政治家だったことがわかりますが、大隈が一番光っていたのはこの時期だったかも知れません。明治十一年に新政府の実力者大久保利通が暗殺された後は、筆頭参議の地位にありました。かって大隈の下にいた伊藤博文、井上馨といった長州出身の参議とも、同じ開明改革派としてうまくいっていましたし、その知恵袋となったのが慶応義塾を開いた福沢諭吉です。ところが大隈は明治十四年の政変で、突然参議の地位を追われたのです。追放劇の発端は、大隈が「明治十六年に国会を開け」という意見書を出したことでした。しかもイギリス流の議員内閣制を主張したため、ドイツ式を考えていた伊藤との間に亀裂が生まれたのです。伊藤が急進的過ぎると反対しているところへ起こったのが、北海道の官有物払い下げ事件です。

北海道開拓を一手に扱っていた北海道開拓使を廃止することになり、薩摩出身の開拓使長官黒田清隆が、その事業を同じ薩摩の豪商五代友厚らに安く払い下げようとした事件です。何しろ明治二年から千五百万円も投じてきた事業が、わずか三十万円、しかも無利子で三十年年賦というのですから、べらぼうな話です。新聞各紙が猛烈な反対論を展開すると、薩摩閥は大隈が扇動しているのだと疑いました。大隈は大蔵卿時代から土佐出身、三菱の岩崎弥太郎の面倒を見ていましたから、大隈の背後には三菱と福沢諭吉がいると云うわけです。こうして薩摩閥と、大隈の早期国会開設に危機感を持っていた長州閥との間に、大隈追放の謀議が成立したのです。大隈が明治天皇のお供をして、北海道・東北の旅に出ていた留守中のことです。十月十一日夜帰京した大隈は、突然辞職を求められました。そして政府は翌日、官有物の払い下げ中止とともに、国会の開設を大隈の主張より七年遅らせ、明治二十三年としたのです。

薩長の藩閥政治は、ここから本格的に始まったとも云えるのですが、参議を辞任して政党を結成した大隈の下に、尾崎行雄や犬養毅など三田門下生が大勢参加したのも、大隈と福沢の結びつきからでした。薩長も政敵に回ったとはいえ、大隈の外交手腕には一目置いていたのでしょう。大隈はその後三回も外務大臣になっています。二十二年十月には、明治外交最大の課題だった不平等条約を改正しようとして、来島恒喜に爆弾を投げられ、右足を失いました。各国に治外法権を撤廃させる代わりに、大審院、現在の最高裁判所に外国人判事を起用しようとして、これが「国辱的だ」と国粋主義者の反発を買ったのです。

大隈が念願の首相の座についたのは、明治三十一年六月、大隈六十歳の時でした。大隈の進歩党と板垣退助の自由党が合同して憲政党という大勢力になり、薩長の藩閥勢力も無視できなくなったのです。日本では初めての政党内閣でした。時事新報は「薩長三十年の政府を乗っ取ったのは、徳川三百年の天下を乗っ取ったに等しい」。こう書いて「画期的だ」と高く評価しましたが、その大隈内閣もわずか四か月で崩壊してしまいました。議会を一度も開かずに予算も作らない。つ

まり内閣としての体をなさないいまま、退陣に追い込まれたのです。党内の勢力争い、知事とか局長といったポストをめぐって旧進歩党と旧自由党とが対立し、内部分裂したためでした。党内をまとめて引っ張っていくリーダーシップとなると、藩閥とか官僚といった強力な味方を持たない大隈の弱さが出ました。

「壮快は愛すべし。が、宰相の器ではない。知はあるが、慮に乏しい」。知識や知恵はあるが、思慮に乏しいと云ったのは、自由民権思想家として知られる中江兆民です。兆民はさらに「だから百敗ありて、一成なし」。百回の失敗があって、一回の成功がない。「在野で、相場師だったら、よかったのだ」と、かなりひどいことを云っています。確かに大隈は首相などにならずに、そのまま野にあって「政界のご意見番」に徹した方が大隈らしかったし、幸せだったかも知れません。第二次大隈内閣でも重要な国策決定を引っ張ったのは、常に外務大臣の加藤高明でした。残念ながら大隈には、加藤と元老の板挟みになり、専らその調停に走り回ったと云う感じしかないのです。

それでも大隈内閣は、最初の難関である財政危機を、思いもかけなかった世界大戦のお陰で乗り切りました。ヨーロッパの血みどろの戦争をよそに、古い鉄砲から大砲、余った材料でも何でも飛ぶように売れたのです。鈴木商店のロンドン支店長高畑誠一、この人は商社日商の創業者ですが、大番頭の金子直吉から「幾らでもいい。何でも手当たり次第に買え」。こういう電報を受け取ると、鉄鋼から砂糖、小麦粉と買いまくり、わずか数か月で数千万円、現在なら数千億円の利益をあげたのは有名な話です。日本中が軍需景気に沸きました。たった一隻を一年で十六隻に増やした船会社。二百人を引き連れて朝鮮に虎狩りに行ったとか、料亭の玄関で百円札を燃やして、明かりの代わりにしたとか。こんな馬鹿げた成金話も、みんなこの頃の話です。

とにかく軍備の拡張に、お金の制約がなくなりました。大隈内閣は大正四年度予算案に、陸軍念願の二個師団増設案を盛り込んだのです。野党政友会に否決されると議会を解散、大正四年三月の総選挙となったのですが、結果は与党立憲同志会の大勝利、政友会の惨敗でした。かっては大正政変の引き金になった「師団増設反対」の声も、大戦景気とドイツとの戦争の前にはかき消されてしまいました。大隈首相以下閣僚が全国遊説に出かけましたが、政党が初めて候補者に公認料を支給して組織選挙になったのも、選挙にお金がかかるようになったのも、この選挙が始まりなのです。中でも大隈の「車窓演説」は、大変な人気だったそうです。列車の停車時間を利用して、大隈が駅前に集まった群衆に喋りまくったのですが、大隈の演説はレコードにも吹き込まれて各地に送られました。

大隈は選挙にも勝って得意満面でした。しかし中国問題をめぐって、再び元老と加藤外相の対立が激しくなっていったのです。その頃の中国は辛亥革命に揺れていました。辛亥の年の明治四十四年十月十日、武昌で始まった武力革命が「滅

清興漢」、つまり「満州族の清朝を滅ぼし、漢民族の国家を作ろう」。この言葉を旗印に、一か月もたたないうちに中国各地に広がっていったのです。日本に亡命したこともある孫文は、民族主義、民権主義、民生主義の「三民主義」を唱えて、四十五年元日、南京に中華民国臨時政府を樹立し臨時大総統に就任しました。清朝は革命鎮圧に軍閥政治家の袁世凱を起用しましたが、この袁世凱が大変な野心家だったのです。袁世凱は皇帝を退位させると、「三民主義」を受け入れると云って、孫文から大総統の地位を譲り受けました。しかし袁世凱の本当の狙いは、自分が新しい皇帝になることだったのです。再び孫文との間に武力衝突が始まり、南京では日本人商店街が襲われて三人の日本人が殺されました。大正二年八月、山本権兵衛内閣の時ですが、「出兵すべきだ」といった強硬論が強まり、話し合い解決を主張していた外務省政務局長の阿部守太郎が右翼二人に短刀で暗殺される事件も起きました。日露戦争に勝って「日本は一等国になった」という自負心。「中国には自分の国をまとめる力がない」、「チャンコロ　チャンコロ」といった中国蔑視。こうした対中国感情が高まっているところへ、第一次大戦が勃発したのです。

外務大臣の加藤高明が、日英同盟を口実にドイツとの戦争を急いだ背景には、「この機会に中国問題を解決したい」。この思いが強くあったようです。実は日露戦争で日本の物になった旅順の返還期限が、間近に迫っていたのです。一八四二年の阿片戦争でイギリス領になった香港がやっと中国に返ってきましたが、それにしても百五十五年というのは長いですね。年表の明治三十一年、一八九八年をご覧になって下さい。第一次大隈内閣が誕生した年ですが、列強の中国侵略の凄まじさがわかります。イギリスもこの年、威海衛と香港対岸の九竜半島を九十九年間借りたので、それがやっと返ってきたわけです。当時の租借期間は、百年から申し訳に一年だけ引いた、九十九年というのが慣例になっていました。ところが旅順だけは二十五年なのです。つまり大正十二年には、中国に返さなければなりません。旅順が短いのは、別にロシアが良心的だったわけではありません。ドイツがドイツ人宣教師が殺されたのを口実に青島のある膠州湾を占領すると、清国は同盟を結んでいるロシアに泣き付きました。するとロシアは「ドイツから守ってやる」と云って、艦隊を旅順に送り込み、そのまま占領してしまったのです。清国の抗議にさすがに気が引けたのか、租借期間を二十五年と短くしたのです。

日露戦争に勝った日本は、日露講和条約でロシアが南満州に持っていた権益をそのまま譲り受けました。ですから満鉄と云われた南満州鉄道にしても、完成から三十六年経った昭和十四年には、中国が買い戻す権利を持つことになっていました。満州は、日露戦争で二十億円の戦費を使い、大勢の血を流した土地です。しかも、これからの日本の発展のカギを握っています。旅順や満鉄をそのまま持

っていたい。この思いは加藤だけではなく元老にも強かったし、あの帝国主義花盛りの時代、ほとんどの日本人共通の願望だったといっていいでしょう。それにしても歴史というものは、ほんのちょっとしたことでその進路を変えてしまうことがあります。もしロシアが臆面もなく、旅順の租借期間を九十九年にしていたら、どうだったでしょう。日本は焦る必要もなかったし、もっとゆっくり満鉄を軸にした満州経営を進めることが出来たでしょう。あるいは日本の「十五年戦争」の幕開けとなった昭和六年の満州事変も、起こらなかったかも知れません。

外交交渉ではある程度お互いの利害が一致しないと、簡単には纏まりません。加藤外相にとって、対独参戦をしてドイツの租借地青島を占領することこそ、その取引材料だったのです。加藤はこの問題を自分の手で解決したいと、早くから決意していたようです。大正二年一月、イギリス大使の加藤が桂内閣外相として帰国する時、グレー外相にその決意を語っているのです。「日本は旅順を永久に占領する積もりだ。いずれ機会を見て中国と交渉する」と。グレーは別段反対もせず、「あなたの言葉をイギリス外務省の文書に記録しておく」と、暗黙の了解を与えたと云われます。

大正三年九月二日、久留米の第十八師団を主力とする日本軍五万一千は山東半島に上陸し、十一月七日に青島を占領しました。天津の居留地保護に当たっていたイギリス軍一個大隊も参加し、形だけは日英共同作戦になりましたが、それは山県が希望したように、イギリスが主、日本が従ではなく、あくまでも日本軍中心の戦いでした。しかも日本軍が山東鉄道全線を押さえたため、この大戦に中立を表明していた中国は猛烈に抗議してきたのです。中国駐在の日本公使でさえ、日本の軍事行動の範囲が広すぎること、日本軍による暴行、乱暴な物資調達が現地で問題になっていると、政府の善処を求めてきたほどです。年が明けた大正四年一月七日、中国は日本軍の即時撤兵を要求してきました。そして一月十八日、それに対する回答の形で大隈内閣が出したのが「二十一か条要求」だったのです。

お手元の資料に主なものを挙げておきましたが、第一号から第五号まで全部で二十一項目あります。日本の最大の眼目は第二号第一条、旅順と大連の租借権、そして満鉄などの買戻権の九十九か年延長でした。これだけに絞っていたら、中国政府も渋々ながら認めたように、日本があれほど非難されることはなかったでしょう。中国分割の歴史で九十九年延長は、どの国も同じような要求をした過去を持っていますし、イギリスのグレー外相も暗黙の了解をしていたのです。まして加藤が最初に考えたように、「青島は中国に返す。その代わりに」と云っていたら、日本の潔さを際立たせていたかも知れません。ところがこの際だと云うので「あれもこれも」と、政党、軍部から実業界、宗教団体に至るまで、雑多な要求がそれこそ「籠いっぱいに盛られた」形になってしまったのです。これがまずかったのです。加藤外相は「全部が全部要求したわけではない。中には希望もあったの

だ」と云っていますが、後の祭りでした。二十一という要求の多さが、「不当な日本」のイメージを大きく膨らませてしまいました。要求を絞り、はねつけられなかった大隈首相、加藤外相の失敗であり、リーダーシップの不在でした。

そしてもっと拙劣だったのが、交渉の進め方でした。日本は欧米各国に内容を事前通告したのですが、知らせたのは第四号までの十四項目だけ。第五号の七項目は秘密にしたのです。そして後々まで英米の抗議が集中したのは、実はこの第五号だったのです。なぜなら、日本人の政治、財政、軍事顧問を雇えとか、警察は日中合弁にするか、それでなければ大勢の日本人を雇えとか。兵器は半数以上日本の物を使うか、日中合弁の兵器廠を作れ。一見して「日本が中国の植民地化を企んでいる」。こう云われても仕方がないような、項目ばかりなのです。加藤外相は秘密のうちに交渉を進め、一挙に既成事実を作ってしまおうとしました。中国政府には「絶対秘密」を申し入れていましたが、交渉に外圧を利用するのは中国の伝統的手段です。袁世凱はいち早く英米の公使に洩らしていました。二十一か条全文がアメリカの新聞に素っ破抜かれ、日本はアメリカ政府の問い合わせで第五号の存在を認める羽目になったのです。結果的には第五号を秘密にしたことが、かえって「日本の野心の表れ」として、英米の疑惑を招くことになりました。

加藤の秘密外交は徹底していました。実は元老たちも、この第五号は知らされておらず、新聞報道で初めて知ったのです。二十五回にわたった交渉は完全に行き詰まり、アメリカ国務長官からは「日本の要求の一部には、どうしても同意出来ない」と云う覚書が寄せられました。第五号のことです。イギリス外相グレーも「日英同盟の基調に疑惑が生ずる」と、懸念を通告してきました。そこで大隈内閣は、問題の第五号を要求から外し、最後通牒することに決定したのです。最後通牒と云うのは、もし云うことを聞かなければ、戦争に訴えてでも、第一号から四号までは実現させようというわけです。

五月四日、元老を交えての閣議で「大変なことになったな。私の意見はご採用にならんか」。こう不満もあらわに口火を切ったのは山県です。山県は大隈首相に意見書を出していました。山県も勿論、旅順、満鉄の維持、発展を絶対としていました。ただそのためには、この大戦の機会に中国とよく話し合い、親善を一層強化すべきだ。軍事力を頼んで威圧するようなやり方は取るべきでないし、アメリカの疑惑を招かないよう、中国政策にについてもアメリカと話し合え。これが山県の持論でした。山県は云っています。「名は正しく、事は順ならざるべからず」。実にいい言葉だと思うのですが、正義を以て立とうとしている日本が、こんな第五号のような、弱い者いじめの要求をするのは何ごとかと云うのです。

山県はさらに「日本の死活問題である満州で中国が譲歩しているのに、戦争に訴えるやり方は最悪の策だ」と、最後通牒にも反対しました。事実、旅順、満鉄と、日本が一番目的としているものは、すでに中国は呑んでいたのです。しかし

憤然とした外務大臣の加藤が、「それでは責任をとって自分が辞職する」と言い出すと、山県にも弱みがありました。加藤外相の辞職は、大隈内閣の総辞職につながります。元老たちは、大隈の後の首相候補をまだ見付けられずにいたのです。結局は山県が「意見を述べて参考に供したまでだ」と折れ、大隈内閣は五月七日、中国に最後通牒を突き付けました。元老も弱くなっていました。中国は五月九日に受諾しましたが、この日を「国の恥の日」、国恥記念日と名付け、反日、排日運動の火が中国全土に広がっていったのです。

大隈内閣はこの後、大正五年十月まで通算二年半続きますが、元老たちはこの時すでに大隈を見限っていました。病気で元老会議を欠席した井上馨は云ったそうです。「およそ今度の外交くらい、失敗した外交はない。日本の百年の計を誤るものだ」。確かに「二十一か条要求」の代償は、日本にとって大変高いものにつきました。中国侵略者はそれまでイギリスであり、ロシア、ドイツ、フランスだったのに、代わって日本だけが非難の矢面に立たされることになったのです。日露戦争の後、中国の知識人にとって日本は、頼り甲斐のある友人でした。孫文も日本に亡命しましたし、世界大戦が始まった頃は、東京だけで五千人の中国人留学生が勉強していました。彼らはこの「二十一か条要求」と共に続々と帰国し、あるいはアメリカに渡って、反日運動の先頭に立ったのです。上海で始まった日本品不買運動は中国全土に広がっていきました。

中国もまた事あるごとに、この「二十一か条要求」を反日宣伝の材料に使いました。パリ講和会議の時もそうでしたし、大正十一年のワシントン会議で、中国代表は「一服だけでも中国を毒殺出来る劇薬なのに、日本はそれを二十一服も盛ったのだ」と云って、非難したのです。まさに日中両国の対立を決定的にしたのがこの「二十一か条」でした。そしてアメリカ政府、アメリカ世論にも「中国を侵略しようとする軍国主義日本」のイメージを強く与えてしまったのです。この大戦の後、「火事場泥棒」という日本語が、そのままヨーロッパの辞書に載ったのだそうです。どうも「農協」とか「住専」とか、外国の辞書に載る日本語にはロクなものがありません。火事場泥棒は「強国の油断を見て、うまい汁を吸うこと」と、意味が書いてあったと云います。確かに日本は、ヨーロッパのように近代戦、総力戦の凄まじさを経験しないまま、楽な戦争で青島、南洋諸島を取り、旅順、満鉄の権利を九十九年延長しました。しかも国内は、空前の軍需景気に沸きました。しかし、国中が酔ってしまった「うまい汁」のツケは大きかったのです。

陸軍で云えば、兵器の面で外国と天地の開きが出来てしまいました。この大戦では新兵器が続々と登場しました。鉄条網を張って地雷を敷設し、機関銃を据え付ける。この塹壕戦を突破するためタンクが登場し、毒ガスも使われました。戦車のことをタンクと云うのは、イギリスがドイツのスパイの目をごまかすため、水槽に見せかけてタンクと云ったためなのだそうです。ところが日本は、この大

戦に観戦武官として従軍したある砲兵大佐が、「現在の編成装備では、列強との戦争に勝てない」。こう装備強化の意見具申をしたところ、「敗戦主義」のレッテルを貼られて陸軍を追われました。「必勝の信念」こそ大切なのに、武器兵器を持ち出すのは何事かと云うのです。世界の五大国になった自信が、精神主義を強くしてしまいました。ドイツは大正七年には、歩兵が一人で持って撃てるサブ・マシンガンを開発していますし、アメリカも翌年トンプソンと云う短機関銃を作っています。これが禁酒法時代のギャングに大量に流れて、派手に撃ちまくるハリウッド映画おなじみの場面になるのですが、アメリカではギャングだって一分間に五百発撃てるマシンガンを持っているのです。どの国も自動小銃が常識になっているのに、日本陸軍は三八式歩兵銃。日露戦争の明治三十八年に採用された鉄砲を支那事変でも使い続けました。装備の劣る中国軍には通用しても、一発ずつ狙って撃つのですから、近代戦では勝負になりません。そして軍人が政治に関心を持ち過ぎ、派閥抗争にうつつをぬかしている間に、日本の陸軍を完全に時代遅れなものにしてしまったのです。

もっと決定的だったのは、大戦後の新しい時代の流れに気付かなかったことでしょう。この大戦ではドイツ、オーストリア、ロシアと、ヨーロッパの有力王朝が姿を消しました。それまで従属していた民族が自立し、あの大英帝国でさえ自治領各国の意見を無視出来なくなっていました。アメリカの発言力も強くなりました。残念ながら日本は、目の前のご馳走にむしゃぶりついている間に、帝国主義の時代が終わり、膨張主義が否定されたことを見落としていたのです。極東では日本にとやかくいう国はないと、ゴーイング・マイウエイを続けてしまいました。私が戦後首相になった石橋湛山が偉かったなと思うのは、当時三十一歳の石橋が東洋経済新報で論陣を張り、「二十一か条要求」に反対していることです。「満州併合がどんなに朝野大多数の強大な感情であるとしても、これはわが国にとって由々しき問題である。強いてこれを強行せんとするか、国家の生存を危うくする」。石橋は「日中関係は帝国主義を捨て、親善の関係を結ぶしかない」と警告したのですが、残念ながら当時の日本では少数意見でした。

よく「明治の第二世代の野心、功名心が、先人たちの作った日本を台無しにした。そして大正世代が、その犠牲になった」と云います。大隈内閣の場合でも、加藤外相の「自分が日本の外交を決めてやる」。この功名心が、道を誤らせたのではないでしょうか。山県有朋という人は「軍国主義の権化」のように云われながら、その実外交にはびっくりするくらい慎重な人でした。長州藩がイギリスなど四国連合艦隊と戦って敗れた苦い思いを、生涯持ち続けていました。大隈首相や加藤外相が、山県たち元老のチエに耳を貸し、生かせなかったのは残念なことでした。まさに第二次大隈内閣こそは、日中対立を決定的にした点で日本の分水嶺だったように思います